

平成 22 年 5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520190
 研究課題名（和文） 「周縁」のドイツ語文学
 —ブコヴィナのユダヤ系文学における多重の周縁性とその表象—
 研究課題名（英文） “Marginalized” Literature in German
 —Jewish Poets from Bukovina: Their Multiple Marginalization and
 Poetic Expressions—
 研究代表者
 藤田 恭子 (FUJITA KYOKO)
 東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
 研究者番号：80241561

研究成果の概要（和文）：

旧ハプスブルク帝室直轄領ブコヴィナは、第一次世界大戦後にルーマニア領となり、第二次世界大戦中のホロコーストを経た後、北部はソ連邦ウクライナ領、南部はルーマニア領に分断された。この地域出身のユダヤ系ドイツ語詩人は戦後、離散した。ナショナリズムやナチズム、反ユダヤ主義が高揚するなか、彼らは政治的にも文化的にも多重的に周縁化された経験を踏まえて詩作を続けたが、長い間正当に評価されず、彼らに関する一次資料も離散先に散在している。本研究では、ルーマニアやドイツに散在する未公開の一次資料を確認した。そのうえで、20世紀の政治的社会的激動のなか、様々な意味で周縁的位置にあることを強いられたこれらの詩人たちが、その状況とどのように対峙し、独自の文学的表象へと結晶させていったのかを解明した。

研究成果の概要（英文）：

The former Habsburg crownland Bukovina produced many Jewish poets who wrote excellent poems in German. These poets were, however, exposed to the tragic history of the 20th Century and had to submit themselves to their multiple marginalization as minorities in Romania as well as outsiders in the German community. They sublimated such experiences to their own poetic world, but their poetry was ignored for a long time. In this project, the researcher conducted research with some important unpublished sources that are scattered around Romania and Germany. On the basis of these sources, the researcher considered, how these poets wrestled with their marginalization and how their poetic expressions are characterized by these experiences.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ系文学

キーワード：ディアスポラ、マイノリティ、ホロコースト、ナショナリズム、ルーマニア、ウクライナ、ドイツ、ユダヤ

1. 研究開始当初の背景

ブコヴィナはハプスブルク帝国最東端に位置していた地域である。第一次世界大戦後にルーマニア領となり、第二次世界大戦後、北部はソ連邦ウクライナ領、南部はルーマニア領に分断された。この地域からは皮肉にも、ルーマニア領となった後、多くのユダヤ系ドイツ語詩人が輩出した。そのサークルの最も若い世代に属していたのが、後に 20 世紀を代表するドイツ語詩人となるパウル・ツェランである。

ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語文学は、第二次世界大戦後にその担い手が離散し、また離散先が東西冷戦によって分断されたこともあり、認知と受容は非常に遅かった。彼らのなかで唯一、1950 年代に文学的評価を受けはじめたツェランは逆に、ブコヴィナという出自から切り離されて評価されることに苦悩した。西ドイツやオーストリアで初めてブコヴィナという地名を冠して諸作品が紹介されたのは 1982 年であり、広範な学術的議論が始まったのは 1987 年以降である。

ルーマニアでは、第二次世界大戦後に詩人アルフレート・マルグル＝シュペルバーやアルフレート・キットナー等がブカレストで活動したことも与り、一部の研究者がこの問題に携わったが、その成果が国外の研究状況に反映されるようになったのは、1989 年の東欧革命後である。

また、近年、ジョージ・L. モッセやエンツォ・トラヴェルソ等により、歴史学、社会学、政治学等の学際的研究として、文化史の視点からユダヤ・ドイツ関係史を読み解く試みが行われているが、ブコヴィナのユダヤ系詩人については、ほとんど言及されていない。(ジョージ・L.モッセ『ユダヤ人の〈ドイツ〉』、三宅昭良訳、講談社、1996 年。エンツォ・トラヴェルソ『ユダヤ人とドイツ』、宇京頼三訳、法政大学出版局、1996 年。)

日本では 1988 年に若山俊介氏が、はじめにブコヴィナに着目した研究成果を発表した。(「ブコヴィナ―かたすみに置き去られたドイツ詩の一地方」、『宇都宮大学教養部研究報告』第 21 号第 1 部、1988 年、199-231 頁)

1990 年代以降、ドイツ語文学におけるブコヴィナの意義は徐々に認知されつつあるが、本研究代表者はその動向を率先して推し進めてきた。ローゼ・アウスレンダーやキットナーに関する研究に加え、19 世紀や第一次世界大戦後のブコヴィナにおけるドイツ語文学へも研究対象を拡げた。1997 年には、

ブコヴィナの詩人たちをも含む「ルーマニア・ドイツ語文学」という新たな分野の研究に着手し、平成 9-10 年度科学研究費補助金萌芽的研究「ルーマニア・ドイツ語文学の歴史と現在」により、日本における研究基盤整備に努めた。その結果、本研究開始当時、東北大学附属図書館には、1400 点以上の関連資料が収蔵されていた。

しかし、ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちを取り巻く政治的事情が東欧革命以後大きく変化したとはいえ、多くの重要な一次資料が公刊されることなく離散先に散在している。特に、ブカレストのルーマニア国立文学館所蔵のマルグル＝シュペルバーの遺稿類は非常に貴重な資料であるが、その資料を一部翻刻したドイツおよびルーマニアの研究者の報告は、本研究代表者が 2004 年に指摘したように、数字的データといった基本的情報においてさえ食い違っていた。(拙稿「ルーマニア領ブコヴィナにおけるユダヤ系ドイツ文学の多重の周縁化―未刊のアンソロジー『ぶな(Die Buche)』をめぐる―」、平成 14-15 年科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書『現代文学に見られるマイノリティ集団の内的多重性の表出―ジェンダー・階層・言語―』(研究代表者 島途健一)、2004 年、72-73 頁参照)また、アウスレンダーの遺稿類は最晩年を過ごしたドイツのデュッセルドルフ市にあるハインリヒ・ハイネ研究所に所蔵されているが、公刊には至っておらず、実際の資料確認が必要であった。本研究ではこれらの重要な一次資料を収集・整理するところから、作業を始めざるをえなかった。

2. 研究の目的

ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちの詩作に共通して深く刻印されているのは、マイノリティ、ショーアー(ホロコースト)、ディアスポラという苛酷な運命と、それにも関わらず、あるいはそれゆえにいっそう強く保持され続けたドイツ語への思いである。ドイツ語は多くの詩人にとり母語でもあり、彼らのアイデンティティの中核として機能し続けた。しかし、ドイツ語に対する彼らの思いは報われることなく、その文学営為は長い間、ドイツ語文化圏におけるもっとも周縁的位置にとどまることを強いられてきた。ブコヴィナでユダヤ系ドイツ語文学が始動したとき、詩人たちは、すでに政治的にはルーマニアのマイノリティであり、ウィーンやベル

リン等ドイツ語文化圏の「中心」とっては、視野に入りがたい存在であった。ルーマニアに軍事独裁体制が成立し、ナチス・ドイツとの同盟関係が成立すると、ユダヤ人大量殺戮が始まる。ユダヤ系詩人たちは、ドイツ語文化圏の成員であることはもとより、人間としての存在自体をも否定された。第二次世界大戦後、州都チェルノヴィツを含む北部がソ連に割譲されると、ユダヤ系詩人たちは世界各地へ離散し、離散先で、多くの場合マイノリティとして暮らしながら、ドイツ語での詩作を続けた。こうして彼らはまたしてもドイツ語文化圏の周縁へと押しやられ、彼らの詩作に対する認知を遅らせることになった。

これらユダヤ系詩人たちの作品が、ブコヴィナという地域を前面に出す形で初めて西ドイツやオーストリアで紹介されたのは1982年であり、本格的受容は1990年代に始まる。前述のように、唯一早い時期から文学的評価を受けたツェランは逆に、ブコヴィナという出自から切り離されて評価されることに苦悩した。ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語文学は、多重的な意味で、その周縁性と対峙し続けたのである。

本研究は、これらブコヴィナ出身のユダヤ系ドイツ語詩人たちを取り上げ、20世紀の政治的社会的激動のなか、様々な意味でドイツ語文化圏のもっとも周縁的位置にあることを強いられた彼らが、その状況とどのように対峙し、独自の文学的表象へと結晶させていったのかを解明する。しかし、彼らの資料は次第にドイツに集まりつつあるとはいえ、現在もなお各地の離散先に散在したまま十分な調査が行われておらず、未解明の点が多い。そのため、ドイツやルーマニア等の諸機関に収蔵されている資料を掘り起して調査し、彼らの文学営為の全体像を把握する。「周縁」に視点を設定することにより、ドイツ語による文学営為について、その多様性の一端を明らかにするとともに、国家の境界線を超えて広がる営みとして捉え直すことが本研究の最終目的である。その意味で本研究は、ナショナリズムの進展と並行して形成されてきた「国民文学」としての「ドイツ文学」という規範を相対化する試みでもある。

3. 研究の方法

(1) 各詩人の離散先に散在する、未公開の、あるいは公開されていてもその内容に疑義のある一次資料を調査・収集し、整理して、先行研究で欠落している部分の基礎資料を補う。また、これら未公開資料の管理体制等についても、関係者と面談し、事情を調査する。

(2) それらの資料を踏まえ、各詩人が自らの周縁性をどのように意識し、そのこととド

イツ語で書くという行為との関係をどのように理解したのか、それはどのような詩的形象をとるに至ったのか、またその詩的形象は、マイノリティ、ショーアー、ディアスポラという状況の変化にともない、いかなる変化を遂げたのか、あるいは遂げなかったのか、等を改めて考察する。

(3) 上記の点について各詩人の共通点と相違点を明らかにする。それによってブコヴィナのユダヤ系ドイツ語文学をいかに評価すべきかという問題について方向性を提示するとともに、国家や民族の境界線を超越するものとしての「ドイツ語文学」という概念の意義と妥当性を明らかにする。

4. 研究成果

研究の前提となる研究基盤の整備に関しては、次の5点を成果として挙げるこ

とがある。

(1) マルグル＝シュペルバーやキットナーが社会主義国となったルーマニアで刊行した詩集等、貴重な資料を古書として入手した。

(2) ブカレストのルーマニア国立文学館に所蔵されているマルグル＝シュペルバーの遺稿の一部、とりわけ兩次大戦間期にマルグル＝シュペルバーが中心となって企画されたブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちによるアンソロジー草稿に関する調査。この草稿に関しては、ドイツおよびルーマニアの研究者による報告が数値的データといった基本的情報においてさえ食い違っていたことを本研究代表者はすでに指摘していた。本補助金によりルーマニア国立文学館所蔵の資料を実際に閲覧し、正確なデータを確認することができた。なお調査に際しては、ブカレスト大学外国語学部ドイツ文学科教授で、ルーマニア独文学会長のジョルジュ・グツ氏に多大なご協力をいただいた。

(3) アウスレンダーの未刊行の遺稿類について、最晩年を過ごしたデュッセルドルフのハインリヒ・ハイネ研究所で確認し、資料として収集することが出来た。

(4) アウスレンダーの編集者で、ローゼ・アウスレンダー財団代表のヘルムート・ブラウン氏より未刊行のアウスレンダーと詩人ペーター・ヨコストラの往復書簡類等についても資料の提供を受けた。また、生前の詩人についても直接、情報提供を受けた。

(5) ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちの共通性を理解するうえでの前提として、彼らを生み育てたこの地域のユダヤ系住民の歴史に関する一次資料や先行研究を、ドイツの同郷人系研究のみならず、ユダヤ側、ルーマニア側、ウクライナ側のものについても収集した。ブコヴィナの歴史については、この地域が多民族の混住地域であるため、各民

族集団の立場から政治性を帯びた記述が行われやすい。そのため、多方面の歴史記述を批判的に検証した上で、それぞれの文脈を見定める必要がある。本研究では各民族集団により提示された資料や先行研究を踏まえ、とりわけ、ルーマニア領時代にユダヤ系住民たちが多重の意味で「周縁化」されていき、ショーアーへと行き着く経緯を確認した。また大戦中のユダヤ系住民の被害についても諸資料を突き合わせ、概要を確認した。そのなかでのユダヤ系住民とドイツ語ドイツ文化との関係を明らかにすることが、詩人たちのテクストを理解する際の重要な前提となった。

上記のような研究基盤整備を経て集められた諸資料や情報を踏まえ、5名のユダヤ系ドイツ語詩人マルグル＝シュペルバー、キットナー、ローゼンクランツ、アウスレンダー、ツェランの足跡と作品について、以下の点を確認した。

(1) これらの詩人は、もっぱら抒情詩という文学形式を選択したが、その背景には彼らが多重の意味で周縁化されたという事情がある。ルーマニアの政治的構成員としても、またドイツ語文化圏の構成員としてもマイノリティとなった詩人たちにとり、抒情詩は、抽象度の高さゆえに、現実の制約から解放され自由に表現する可能性を秘めた文学ジャンルだった。

(2) これらの詩人たちは、表現主義やフランス象徴主義等の文学潮流を十分に理解していたにもかかわらず、ツェランを除く者たちは兩次大戦間期に、伝統的詩観への回帰傾向を示した。その背景には、ハプスブルク領時代のブコヴィナにおけるドイツ化政策という歴史があり、ドイツ語による文化価値が彼らに内面化されていたという事情がある。彼らにとって風景や自然という伝統的詩のモチーフや詩形式は、普遍性を内在させたものであり、それによって、人間を翻弄する政治情勢への文学的抗議ともなりえた。それは、兩次大戦間期のルーマニア化政策の抑圧や大戦中のショーアー、第二次世界大戦後の社会主義体制による抑圧への抵抗として機能し続けた。

(3) 第二次世界大戦中のショーアーを契機に、各詩人はドイツ語ドイツ文化や伝統的詩形式について、相異なる捉え方を表明するようになる。とりわけ、ツェランの詩「死のフーガ」は、他の詩人たちと共通するモチーフを扱いながらも、ドイツ語ドイツ文化に対する深い懐疑を優れて詩的に表すことに成功した。

(4) 第二次世界大戦後の詩作活動については、各詩人の個人的資質に加え、離散先の社会的政治的状況が大きく影響し、その特徴を形成している。例えば、マルグル＝シュペル

バーやキットナーのように社会主義体制下では、伝統的詩形式は社会主義イデオロギーによる抑圧への抵抗や逃避の可能性を意味していた。ローゼンクランツは、戦後、約10年間をシベリアの収容所で過ごしたが、その間の彼の作品は、やはり「普遍性」を内在させるものとして伝統的詩形式が重視されている。アウスレンダーは押韻等の伝統的詩形式から距離をとったものの、読者とのコミュニケーションを断念するまで徹底的に詩形式を解体することはできなかった。ドイツ語を通しての読者とのコミュニケーションの可能性は、アウスレンダーにとり、唯一残された他者との共生の拠り所だった。ツェランは、それに対し、従前のドイツ語表現形式にショーアーを生み出した契機を見出し、それらを徹底的に排除した新たな「ことば」の可能性を追求し続けた。

(5) 彼らにより生み出された詩的表象は、ブコヴィナという共通の歴史的社会的文化的土壌に培われたものであり、この事情を斟酌することなく、ツェラン以外の詩人たちに否定的評価のみを与えることは、ドイツ語文学の多様性を黙殺することへと繋がることを指摘した。

なお本研究の成果の一端を、博士学位請求論文「ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語文学—『周縁性』の表出としての抒情詩—」としてまとめ、平成21年11月に東北大学大学院国際文化研究科より「博士(国際文化)」の学位を取得した。

また本研究補助金の報告書を2010年3月に刊行した。『「周縁」のドイツ語文学—ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語文学における多重の周縁性とその表象—』(平成19年度～平成21年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書、2010年、全128頁)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 藤田恭子、「南東ヨーロッパ発の Germanistik—ジョルジュ・グツ教授の特別寄稿によせて—」、『東北ドイツ文学研究』、第52号、2009年、133-135頁、査読無。
- ② 藤田恭子、「ローゼ・アウスレンダーにおけるブコヴィナ像—多文化共生神話の生成と受容をめぐって—」、『東北ドイツ文学研究』、第50号、2007年、163-184頁、査読無。
- ③ 藤田恭子、「はじめに(特集:多元文化世界としての中・東欧におけるドイツ語文

学)、『東北ドイツ文学研究』、第 50 号、2007 年、73-76 頁、査読無。

- ④藤田恭子訳、坂本清子著、「文章作法入門ードイツにおける『ロシア・ドイツ人』文学の困難な出発についてー」、『東北ドイツ文学研究』、第 50 号、2007 年、185-196 頁、査読無。

[図書] (計 1 件)

- ①藤田恭子、『「周縁」のドイツ語文学ーブコヴィナのユダヤ系ドイツ語文学における多重の周縁性とその表象ー』、(平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)) 研究成果報告書、2010 年、全 128 頁。

[その他]

- ①藤田恭子、「ノーベル文学賞 ヘルタ・ミュラー氏に寄せて」、『産経新聞』文化欄、2009 年 10 月 11 日、10 頁。
②藤田恭子、「ヘルタ・ミュラーとルーマニア・ドイツ語文学ーノーベル文学賞受賞によせてー」、『Brunnen』第 461 号、郁文堂、2010 年、13-15 頁。
③藤田恭子、「ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語文学ー『周縁性』の表出としての抒情詩ー」2009 年 11 月 18 日 「博士(国際文化)」取得 (東北大学大学院国際文化研究科) 東北大学リポジトリで公開予定

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 恭子 (FUJITA KYOKO)
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：80241561

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：